



こーひーぶれいく

お茶，茶碗，日本の美

鈴木 達也

Suzuki Tatsuya

私の大学での1日は、研究室でお茶を点てることから始まります。お茶を点て、お茶をすすすることで、心を落ち着かせて、それまでの時間をリセットして仕事を始めるというルーティンです。お茶は、子供のころから日常的に家で点てており、それを踏襲しているだけです。我流と言いますが鈴木家流です。要するに、適当に入れていくということです。さて、私が普段使っている茶碗は、私自身が焼いたものです。元々、お茶碗を作ろうと思いついたのは、薪ストーブから出てくる灰を有効活用したいと考えたからです。つまり、灰を釉薬として用いるために始めたわけです。陶土は、購入しています。趣味人としての理想の1人が川喜田半泥子で、彼は出張先で土を持ってきて、それを使って焼いたりして、そのうちに真似をしたいものだと思っています。私の自身の實力はひどいものですが、ぼちぼち楽しんでます。もっばら、お茶碗を焼いているわけですが、時々、水差しを作ってみたり、蚊遣りを作ってみたり、日常に必要なものをこしらえています。釉薬は、基本的には木灰のみでシンプルですが、身近にある鉄等の金属成分を加えて発色を試みたりもしています。思うようにはできていませんが、それでもでき上がったものを見ると楽しいものです。使っているのは電気炉なので、そのまま焼くと酸化焼成になります。できれば、還元焼成もしてみたいと思っています。土や釉薬にどういった元素が含まれていて、酸化焼成では、あるいは還元焼成では、その価数が増えるのでどのように変化するかと考えるのも面白いものです。

自分で、お茶碗を作るようになると名品も見たく

なるもので、元々、美術館や博物館に行くのは好きで、若いころにはどちらかと言うと西洋の美術品や絵画を好んで見に行きましたが、最近では日本の美術品に惹かれるようになってきており、時間があれば、茶道具をはじめ良く見に行っております。コロナ下で、多くの展覧会が中止になって残念です。コロナが流行る少し前の2019年には、耀変天目で、なかなか見ることができない龍光院所蔵の茶碗を拝見することができ、国宝の三碗をすべて見ることができました。少しタイミングが悪ければ、今度、特別公開されるのはいつのことになったかと今更ながら安堵しております。茶碗の名品を見ると、その形状、見込み、口の形等、真似てみたいと思うわけです。例えば、光悦は、基本的に楽焼ですが、口縁部分をスパッと切り取ったものが多いように見受けられ、それを真似て作ってみました。実際に使ってみると、私には口当たりが悪いような気がして、次に、切り取った後に指でなでて少し丸みを持たせたものを作ったりして遊んでいます。

日本の美術は、焼き物、漆器、時絵等、実際に使えるもの、使っていたものの中に美があり、絵画であっても日本のものは季節に応じて、あるいはその時々状況に応じて飾り、人をもてなしたり、自らを楽しませたりするもので西洋のものとは違う大らかさがある、日本の美術品に囲まれていると心が穏やかになるように感じます。

私の先輩や知り合いの研究者の中には、このような美術に関する分析等も仕事にしている方が多くおり、放射線応用の1つとして文化財科学も挙げられるので、この *Isotope News* を読んでいらっしゃる方々の中にもいらっしゃるものと思っております。私の本業としては原子力化学ですが、文化財科学に係るような研究等も行ってみたいものだと思っております。

(長岡技術科学大学 原子力システム安全工学専攻 兼 ラジオアイソトープセンター長)